氏　　名	豊増　佳子
学位の種類	博士（　看護科学　）
学位記番号	博甲第　10331　号
学位授与年月	令和　4　年　3　月　25　日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	遠隔看護の実践に向けて看護基礎教育に求められる ICT 教育内容に関する研究

主　　査	筑波大学教授	博士（医学）	日高　紀久江
副　　査	筑波大学准教授	博士（保健学）	柴山　大賀
副　　査	筑波大学助教	博士（看護科学）	菅谷　智一
副　　査	筑波大学准教授	博士（学術）	水野　智美

論文の内容の要旨

豊増佳子氏の博士学位論文は、遠隔看護実践の普及に向けて、看護基礎教育に求められる教育内容を明らかにすることを目的とした研究であり、その要旨は以下のとおりである。

（目的）

著者は、本研究における遠隔看護について、情報通信技術（Information and Communication Technology: ICT）を活用した看護実践と定義し、人口の高齢化や医療費の問題から在宅医療が推進されている現代の社会情勢の変化や新型コロナウイルス等に代表される感染症の拡大、自然災害の発生により ICT を活用した医療や看護の必要性が高まりつつあるが、日本では遠隔看護について、系統的な教育内容や方法については十分に検討されていないことが問題であると述べている。そこで、遠隔看護を実践するためにはどのような教育が必要なのか、看護の基礎教育に求められる教育内容を探索することを目的に本研究を行っている。

（方法）

研究 1 では、遠隔看護の研究者及び実践者を対象に、遠隔看護の実践に向けた看護基礎教育内容についてデルファイ法を用いてコンセンサスを測定している。著者は、van Houwelingen（2006）が開発した遠隔看護実践に必要なコンピテンシー（7 カテゴリ、52 項目）に準じて調査票を作成している。第 1 次調査では、128 名に調査票を郵送し 33 名から回答を得ている（回収率 25.8%）。対象となる 33 名の平均年齢は 47.8 歳、職種は看護師、医師、システムエンジニア、工学系の教育者等であり、遠隔医療や看護の研究や実践等においてインターネット、タブレット端末、テレビ電話等での実施経験を持っていた。第 2 次調査では、第 1 次調査の対象者 33 名に調査票を配布し 26 名から回答を得ている（回収率 78.8%）。第 3 次調査では 24 名（回収率 92.3%）を対象にデルファイ法により調査を行った結果、看護基礎教育の中で必ず学ぶ必要性が高いと 90%以上の対象者が回答していた主な項目は、[Communication Skills]の「コミュニケーションに集中し、明確な問いかけを通じて問題を明らかにするスキル」、「患者の話をよく聴き、明確な質問をするスキル」、「患者の意欲を高めるコミュニケーションテクニック」、[Attitudes]の「患者の自己管理を支援し、治療

に積極的役割をとれるよう促す態度」の順であったと報告している。コンセンサス測定の結果は、[Communication Skills]に関する 8 項目中 5 項目、[Knowledge]は 13 項目中 5 項目、[Attitudes]では 12 項目中 5 項目等が教育の優先度の高い項目として選出されている。

次に、コンセンサスを形成するために、コンセンサス測定の最終結果に対してノミナル・グループ法を用いて教育内容の優先順位と承認の最終合議を得ている。コンセンサスの形成には、コンセンサス測定の第 3 回目の参加者 24 名で討議を行い、その内容を言語データとして分析し、van Houwelingen の 52 項目のコンピテンシーについて、優先度順に A,B,C の 3 段階に分類することで教育の優先度を特定している。さらに、日本の社会情勢や科学技術の進化を考慮しつつ、ICT や SE を含む専門職等とのコミュニケーション能力について重点をおいた教育の必要性等について、最終的なコンセンサスを得ている。

研究 2 では、看護系大学等における看護師養成教育を行っている教員を対象に調査を行っている。全国の看護系大学において協力の得られた 88 名中 85 名（96.6%）が、基礎教育の段階から遠隔看護についての教育が必要と回答していたと報告している。研究 1 の結果に基づき、遠隔看護の実践者を養成するために必要な教育内容のコンセンサス測定の結果、研究 1 において教育優先度の高い A 群 20 項目は、研究 2 においても教育の優先度の高い 22 項目に含まれており、その他[Knowledge]の「遠隔看護の（臨床的）限界に関する知識」、「遠隔看護の将来的な有用性・可能性に関する知識」が含まれていた。その上で、研究 1、2 とも教育の優先度はほぼ同様な傾向を示していたと報告している。

次に、最終検証として、看護系大学の教育者 21 名を対象に、フォーカス・グループ・インタビューを実施し、エキスパートコンセンサスを得ている。教育優先度の高い A 群 20 項目のほか、教育の重要性が高いと考えられる 6 項目、フォーカス・グループ・インタビューで新たに提案された 14 項目を追加し、計 40 項目を最終結果として抽出している。それらの項目はフォーカス・グループ・インタビューの結果を踏まえ整理、再統合を行い、遠隔看護の教育内容を新たに分類している。

（考察）

著者は、本研究の結果を踏まえ、遠隔看護実践を行うには「コミュニケーション」、「法律・規則、倫理」、「ICT：情報通信技術」、「臨床・看護実践の基礎」「遠隔看護実践の基礎」、「データ・情報」の 6 カテゴリーに関する教育が必要であると述べている。看護基礎教育では医療や看護に関する知識及び技術の習得が必要とされるが、特に遠隔看護に求められる「臨床・看護実践の基礎」では具体的な教育内容を明示する必要性や、看護学と情報学を融合させた ICT に関する教育をどのようにカリキュラムに取り入れるか、また対面とは異なるコミュニケーション技術を習得できるような教授方法等について、具体的に教育方法を検討する必要があると考察している。

審査の結果の要旨

（批評）

豊増佳子氏の博士学位論文は、遠隔看護実践の普及に向けて、看護基礎教育に求められる教育内容を明らかにすることを目的とした研究である。社会情勢や自然環境のいかなる変化に対して、安定した看護を提供できる遠隔看護の実践者を育成するための素地となる本研究は、看護の発展に寄与する意義ある研究である。また、遠隔看護の教育方法について多角的な検証を行い、教育内容についての新たな知見を得たことから、学術的にも意義のある研究と判断した。

令和 3 年 12 月 21 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（看護科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。